

『公民館』一九六五年四月（全国公民館連絡協議会）

公民館活動と調査 《第三回》

調査の対象とそれへの迫り方

矢口 新

調査というのは、ある「もの」に対して、問いかけをすることであり、そこから答えを引き出すのである。その「もの」は何であるかはつきりしておかなければならない。そういうことが案外漠然と考えられがちなのである。つまり調査の対象は何であるかということがある。しかし、この対象という言葉もあいまいであつて、うっかり使うと間違いをおかす。たとえば、「この村の人々はどう考えているか」というような場合、われわれは、村の一人一人に聞いたら答えが出ると考える。それは考えなくてもわかるほど、もうすっかりわれわれの身についた方法なのである。

しかし、これをよく考えてみると、いろいろな意味がこの中には含まれている。われわれ

は第一に村に対して聞いているのである。実際には一人一人に意見を聞くのであるが、それを集めて「村というものがどう考えているか」というようにまとめようと思つていのである。「村というものがどう考えているか」ということは考えてみるとおかしなことである。「村というもの」が考えるはずはない。この村とはなんであるか。この場合人々の集団である。もちろんある一定の地域、空間的な広がりを持たない。「村はどう考えるか」というのは、村という人間の集団が、あたかも怪物のごとく何か考える意志をもつていて、そして考えているのだというように考えようとする考え方をもつているのである。

そうして、そのことを明らかにするために、われわれは反射的に人々に聞くという動作をする。一人一人に聞けばそれが出ると考え

る。かりに千人の人がおれば、千人に聞けば答えが出ると考えている。そこには統計というものが暗々の中に考えられている。考えようによっては本当は千人に聞けば、千通りの答えが出るのであつて、それ以上の何ものでもないはずであるが、そこには、暗々の中に、それをまとめようという考え方があるのである。

まとめるといふのはどういうことであるか。一番簡単なまとめ方は、多数決という方法である。調査などという場合でなく、日常生活の中でわれわれはそれを使つていいる。多くの人が集まつて議論をしているときなど、意見がまとまらないと、最後に右か左かの二つにわけて、どちらかということをして一人一人に答えてもらつて、まとめるのである。そして一つの意志を決定する。無意識にやつているのであるが、考えてみると、なかなかうまい知恵であるともいえる。調査をするときも、そういう身についた知恵が働いて考えなくとも何となく、そういう方法がとられるのである。

簡単な場合はそれでよいかもしれないが、本当によい調査をしようと思つたら、そういう点をはつきり自覚しておかなくてはならない。つまり対象はなんであるのか、その対象の姿を明らかにするのにどういふ方法を

使うのかということである。上の例でいえば、社会を対象として、個人個人の意見を聞いて、それを統計としてまとめるという方法を使っているわけである。

二

調査をするという場合には、調査の問題が出てくるということがまずはじめになければならないということを前に述べたが、その時には、実は、はじめからなんらかのある対象が明らかになっているはずである。少なくとも意識の底には、何に對して聞こうとしているのかを考えられているはずである。しかし、それを漠然として出発してしまうと、途中で焦点がぼやけることが多くある。そうして、せっかく調査をしても答が出ないことがあるから、はじめによく自覚しておく必要があるのである。

そういう点でまずわれわれは何に對して何を聞こうとしているのかということを最初に考える必要がある。とくに、何に對してかということは、とかく忘れられがちであるから、十分考える必要がある。それを考えてはじめて、はつきりした方法が成立つというものである。

方法という点から考えると、一つは統計的な方法であり、一つは事例的な方法であると

いうことはよくいわれるが、これは右に述べたような何に對して聞くのかということを中心にしてきまってくるのである。国勢調査で職業別人口を調べるといふような場合は、国という人間の集団がどのような職業をもっているかを問うているのである。これは社会を一つのものとみて、その社会をつくっている要素を一つ一つあげて、それを分類して、その社会の性格をきめるのである。村の中に農家がいくつあるかを調べるのは、村という単位の一つの社会をおいて、その社会のもっている農家を数えて、その社会の性格をきめる。全戸数のうち五〇%の農家があるといふように考える。こういうのは統計的な調査である。

ところが、問題の性質によつては、そういう方法ではやれない場合がある。たとえば、農家の改善の状態を調べようとする。毎日毎日のような働き方をしていのかを調べることを意図する。そういうとき、ある一軒の農家をとつて、毎日朝何時におきて、それから何をしようというように詳しく調べる。一年中での季節はどのように働いて、どの季節はどうだといふようなことを明らかにする。こういう調査もある。それは、日本の農家はどんな働き方をしていのかといふような問題から出発して、そういう調査が成立し

たとしても、実はただ一軒の農家を調べたにすぎないので、それをもつてただちに日本の農家全体がこうだといふようなことはいえないであろう。これは一つの事例にすぎない。しかし、これが事例であるといふのは、実はもっと詳しく、この農家がどういふ性格の農家であるかを明らかにしなくてはならない。たとえば、家族は何人いて、耕作面積がどれだけで、機械を使っているとかいふこととか、何を作っているとか、といったことである。そういう農家は他にもあるかもしれないが、その中の一軒がここにとりあげられているといふ、そういう事例なのである。

こういう事例が詳しく調べられると、それはまたそれなりに、一つの農家の姿を明らかにしてくれる。日本の農家という一つの全体を考えて、牛のいる農家が何戸、耕作面積のどれだけの農家が何戸といふのはちがった形で農家一戸一戸の改善の仕方、働き方などを明らかにする。事例研究といふのはこういう研究をいふのである。

事例をあげて、つかもうとするには、その事例がどういふ事例かが明らかにされなければならぬ。つまり事例研究といふのも、全体の姿を明らかにするための方法であるにはまちがいない。直接の対象はその事例であるが、根底には、全体として日本の農家は

どんな働き方をしているかというような調査の問題があるのである。それを、しかし、日本の農家全体を対象として調べようとするのではなく、事例によって調べようとするのである。事例という言葉が示すように、一つの例なのである。一つの例がとられるには、その例が、全体の中でしめる地位が明らかでなくてはならない。つまりどういう例かということである。そのことがはっきりしないと、せっかく一つの例をとってもなんだかよくわからないことになる。

三

事例調査をするか、統計的な調査をするのかということは、調査を設計する場合に、はじめから考えておくべきことである。というのは、最初に調査の問題が起こつてきた時から、どういうものに対して、何を聞こうとしているのか、それはどういう方法で聞くことができるのか、ということも考えていなくてはならないということである。

「町村の公民館のやっている青年学級は効果をあげているだろうか」というような問題が出てきて、それを明らかにしようとする効果をあげているということはどういうことなのか、人が集まっていることなのか、青年が活発に活動していることなのか、そこにはいろいろのことが考えられる。これは青年学級の全体を対象として、調べることもできるし、その中のいくつかの事例をとってしらべることでもできる。十学級なら十学級ある青年学級を一つの全体とみて、五十人以上の青年学級がいくつで、以下のがいくつというように見ようとすれば、一つ一つの要素たる青年学級の生徒数をかぞえて、統計すれば出てくることになる。毎日の出席五〇%以上がいくつで、それ以下がいくつというように見ることもできる。

さて、その二つのタイプのそれぞれについて、どんなふうにも、青年は学習をしているかを詳しく調べてみる。たとえば、教科書を読むときの態度はどうか、教師との話し合いはどんなふうに進むのか、生徒同士の話し合いはどうかといったことを事例的にしらべてみるとする。もちろん事例でなく、全青年学級についても調べられるが、そこには現実の問題もある。手間がどうかということもある。一つ一つの学級に対して長期に調べていくということになれば、とても全数のものについて当てることはできない。全数について当るとなると、それはどうしても形式的になる。教師との話し合いは活発かという質問を出して、それを先生か生徒に答えてもらうとい

うようなことなら、それは数多くてもできる。しかしそれは、答える人がどの程度を活発と考えるかということによってちがってくる。なるだけ、基準をはっきりさせて、生徒の発言がなん回以上あるか、というような項目で問いを出す、というやり方をしても、依然として、形式的であるということになる。事例研究はそういう点は、調査者の基準がしっかりしておれば、きわめてはっきりした答えが出るともいえる。

どちらの方向で対象にせまり調査問題を明らかにするかは、大切な問題である。しかし、調査はそのどちらかでなければならぬということではない。実は両々相まって実態が明らかになることが多いということである。そこでいつも最初から、どういう対象をどのようにして分析するのかをいつも考えて調査問題をつくりあげていく、調査の項目を構成していくというように考えなければならぬ。

> 国立教育研究所員 <